亡父省齋ハ其御用掛ヲ命ゼラレテ、日夜奔走シタガ、民部公子ハ慶應三年ノ正月十一日ニ佛國船ニ乘込ミ、滯リナク出帆サレタ、其時亡父ノ余ニ言ハレタノニハ、日本ノ形勢モ非常ノ變化ヲ生ジ、將軍ノ愛弟ガ洋行セラレルコトニナツタ以上ハ、汝モ亦洋學ヲ脩行シテ早晩洋行スベキデアルト、余ハ其頃ハ昌平學校デ漢學ノミヲ修行シテ居タガ亡父ノ話シヲ聞イテカラ、洋學脩行ノ志ヲ立テ、横濱ノ外國語學所ニ入學ヲ志願シ、夫々準備モ整ヒ、慶應四年正月出發ノ筈デアツタ處ニ、鳥羽伏見ノ戰爭ガ起リ、殘念ナガラ横濱行ハ不可能トナツタ、此外國語學所ハ幕府ガ佛人ヲ教師トシテ佛語ヲ傳習シタ處デ陸軍幼年學校ノ前身デアル、正月上旬、只今將軍樣ガ濱御殿カラ御上陸ニナリ、五六騎乘リ切リテ御入城ニナツタトイフコトデ、皆々驚キ且怪ンダガ、全ク事實デアツタ、前年朝鮮デ佛國ノ宣教師ヲ殺害シ、佛國ガ怒テ江華島ヲ砲擊シ、國交斷絶シテ居タノヲ、日本ガ仲裁スルコトニナリ、亡父ハ其任務ヲ帶ビテ、先ヅ對州ニ渡航シ、朝鮮ニ進行スル豫定デ、準備ヲ整ヘ、將軍ニ謁見シテ、最後ノ訓令ヲ受ケル爲メ、京都ニ立寄ツタトキハ、大政奉還後デアツタ、朝廷デモ、平山圖書頭ノ朝鮮派遣ハ、其儘決行セヨトノ御評議デハアツタガ、將軍ハ大阪

ニ引上ゲラレ、亡父モ隨從シテ下阪シ、專ラ機密ノ事務ヲ取扱ヒ、將軍俄カニ歸東セラレタル後跡始末ヲ爲シ、軍艦蟠龍丸ニ便乘シテ、正月十二日歸府シ朝鮮行ハ中止シタノデアル。

四月八日ニ至リ其方義嚴科ニ處セラルベキノ處格別ノ寬典ヲ以テ處スベキ旨ノ勅諚ニ付永蟄居ヲ命ズルト云フコトニナツタ。

亡父ハ謹愼ノ身トナリ門ヲ閉ヂ屏居中官軍方ノ激徒ガ襲來スルヤモ計ラレズトノ風說アリ、因テ余ハ書生二人ト共ニ、千住在ノ花又村知人某氏ノ宅ニ避クルコトヽナリ、三月四日墨田河ヨリ舟デ綾瀨川ニ入リ、花又村ニ向ヒタルガ、此船ハ江戸ノ糞尿ヲ取リニ來ルモノデ、糞桶ノ上ニ莫座ヲ敷キアリ、三人ハ少年ナレドモ、士ニテ大小二本ヲ差シテ居ルカラ、官軍ノ番兵ニ咎メラレテハナラヌト、船子ノ注意ヲ受ケ、心配シツヽ潛ミ居リ、無事目的地ニ到着シタ。

花又村即事

小橋流水翠畦間、十里晴郊不見山、

日暮耦耕人去盡、菜花深處鳥聲閑、

亡父ハ、日光ニ避クル豫定デアツタガ、日光マデハ行カズ、三月九日行德ノ知人ノ家ニ行キ、十三日更ニ常州長竿村ノ知人ノ家ニ轉ジ、江戸ノ安泰ナルヲ聞イテ、二十三日歸宅シ、余モ少々先キニ歸宅シタ。

慶喜公ハ朝廷ニ對シテ一意恭順ヲ表セラレ、二月十二日城ヲ出テ、上野山內ノ寺院ニ入リテ謹愼シ、四月十一日更ニ水戸ニ赴カレタ。臣下ノ激動ヲ心配セラレ、王師ニ抵抗スルハ双ヲ自分ニ加フルニ齊シトイフ樣ナル痛切ノ布告ヲ發シテ、人心ヲ鎭撫セラレタカラ、大ナル騷動ハ起ラナカツタケレドモ、激徒ガ種々ナル名稱ノ團結ヲ爲シ、所々ニ集合シタルモノハ少ナクナカツタ。其內彰義隊ト稱スル連中ハ、上野山內ニ立籠リ其附近ヲ往來スル官軍ニ反抗スルガ如キ擧動ヲ爲シ遂ニ官軍ハ攻擊ヲ受クルニ至ツタ。

五月十五日ハ朝來降雨ナリシガ何ヤラパチパチ異樣ノ音ガ聞ヘダシタカラ、屋上ノ火見臺ニ上ツテ、音ノスル方ヲ眺メタ。其內ニ上野デ官軍ト彰義隊トノ戰爭ノ起ツタ事ガ分ツタ。門前ハ人ノ往來モ少ナク、只官兵ガ銃ヲ持テ巡邏シテ居ル位デアツタガ、午後銃聲モ

止ミ、靜謐ニナツタ。若シ戰爭ガ夜マデ續イタナラバ、所々ニ集合シテ居ツタ連中ガ、彰義隊ニ應援シタラウカラ、隨分騷ギガ大キクナリ、火災等ガ起ツタカモ知レヌ、昌平學校ノ同窓河島ト云フ者ノ父ハ、下谷ニ住ンテ居タガ、物好キニ戰爭見物ノ爲メ廣小路ヘ出掛ケ、官軍ノ一兵ニ斬付ケラレ逃ゲテ歸ツタガ、自宅ノ門前マデ來テ倒レテ死ンダノハ、氣ノ毒ナコトヲシタ。

五月十五日記事

世事紛々不耐嗟、燒殘三十六僧家、却怪東臺春又至、
糢糊鮮血艶於花、
滿目風光總情愴、微雲淡月武陵城、新愁千尺深於海、
聽盡東臺巨砲聲、

余ノ實家竹村ハ、下谷ノ藤堂邸ノ裏デアリ、實兄本五郎ハ橫濱ノ外國語學所デ佛語ヲ傳習シタ一人デアツタカラ、余ハ四月頃ヨリ兄ニ就テ、佛語ノ稽古ヲ始メタ、亡父謹愼中ユヘ、自分ノ家ノ門ヲ出ズ、庭傳ヒニ右隣ノ松本家ノ門カラ出入シ、竹製ノ饅頭笠ヲ被リ、

目立タヌ様ニ往來シタ、宅デハ書生ト共ニ、亡父ノ教ヲ受ケテ、讀書作詩等ニ日ヲ送リテ居ル内ニ、四月二十九日田安龜之助(家達公)ニ徳川ノ家名相續ヲ仰付ケラレ、五月二十四日ニハ七十萬石ヲ賜ハリ靜岡藩主トナラレタ。

五二　井野邊史料編纂官の「明治戊辰の回顧」を讀みて感多し

一

昭和六年一月號の「日本魂」第二十一頁に、井野邊氏の「戊辰の回顧」が掲げてある。其れに依ると、岩倉具視は、如何にも公正にして平和を欲したる一大人物の如くに書いてある其の以前「姦物」と云はれた世評は全然嘘であつたが如き筆鋒を以て論じられてある。而して徳川慶喜に付ては、全然戰爭を欲せざりし人物として記してある。慶喜に關する論評は誤りなかるべし、井野邊氏の論ずるが如くに「二人共に、兵力に訴へて、時局を解決する

考はなかつた」と明白に斷定するならば、此の平和の慶喜を目して、反逆者となし朝敵と宣したる岩倉等は、「甚しき權變の人なり」と論定せざるを得ない筈である。反逆を爲すの意思なき反逆人なるもの、法理上ある理由なし。井野邊氏も、好く此の道理を理解せらるゝ事であらう。然らば、何故に井野邊氏は史家として、此の嚴正の態度を取られないのであらうか、余には其れが疑問である。

又岩倉が、慶喜に上京を命じたるは、井野邊氏の記さるるが如くに、「慶應四年の一月二日」ではなくして、其の前年の十二月の二十八日に、岩倉の命を受けて、慶喜に上京を促す爲めに、尾州と越前とは、代表者を大阪城に出して居る(此事は、永岡清治氏著舊夢白虎隊第一三四頁に詳記してある、他の書物例ば、井上一次氏の白虎隊の事を書いた書物にもあつて、余は「前編」に之を引用して居る)岩倉具視が、中根雪江に向つて、慶喜の上京を依頼したのは、其以後の事である。要するに、慶喜は、進んで戰はんが爲めに上京したのではなく、命ぜられて上京したのである。

鳥羽伏見の交戰は、岩倉、大久保、西郷等の豫め策動して、惹起せるものである。若し

も岩倉にして、戰爭を避けんとせるものならは、或は戰爭を皇國の爲めに、有害也と判斷し、平和に解決せんと欲したものならば、小御所會議に於て、不公正なる術策を弄せず、王道をさへ行へば、其れで好かつたのである。岩倉は西鄕に勵まされ小御所會議に於て、如何なる態度を取りしかは、余が前編に論じたる通りである、之れ史實である。

萩野博士の著「王政復古の歴史」第一八六頁には「薩長二藩は、かねての計畫の如く、兵力に訴へて、幕府三百年の勢力を根柢から破壞する好機會を捉へ得たのである、其の愉快、其の得意は想像の外であらう」と書いてある。此の見解の通りであらう、唯だ余の甚だ理解し難いのは、從來の歴史家は、此等權謀の擧を筆誅するの嚴正なる態度を持せずして、反て權變術策の行動を讃するが如き不快なる筆緻を弄すること其れである。歴史家の權威は、斯くては失はるべく、御用の學者たるに墜するであらう。日本の文化史の爲めに遺憾至極である。

明治戊辰の春の回顧

史料編纂官　井野邊茂雄

『明治戊辰の春めでたい新年を迎へたけれども、京阪の地方は何となく穩かでない。今にも騷動が起りさうなけはひである。それは在京の薩長二藩の軍隊と、大阪の德川氏の軍隊とが遙かに睨みあつてゐたからである。しかしかやうな形勢も、一世の英雄岩倉具視の公明なる裁斷によつて、緩和せられやうとした。元旦の夕、具視は越前藩士中根雪江を招き『薩摩や長州は、是非とも干戈を動かさなければならないとの議論であるが、自分は必ずしもさう思はない。敵味方互に舊怨を解き、相共に御奉公が出來れば結構だと考へてゐる。二藩では何とか手段もあらう、ついては一刻も早く內府德川慶喜自ら上京して、土地人民を奉還するやうにしたい。然らば內府を議定職に任命する途も開けてくる、越前の周旋を賴む』といつた。雪江は『それは何よりの事であるが、土地人民の奉還は、列藩一同に願ひたい』と答へ、具視もまたこれに同意したので、喜んで具視の邸を辭した。

あくれば正月二日雪江は再び具視を訪ひ、昨日の問答を書き付けたものを示し、この通りで間違ひはないかを確めた。具視之を承認し『內府さへ上京すれば、あとの始末は如何樣にも出來る』といつて雪江を勵ましてゐる。そこで雪江は、其書を携へて大阪に赴き、

慶喜の上京を促さうとしたが、まだ出發しない內に、鳥羽伏見の變が起つた。岩倉具視が敵味方互に舊怨を解き、相共に手を携へて、維新の政を行はうとしたのはその頃一世を風靡せる土藩の公議政體論に共鳴したからである。公議政體論とは、公議輿論の力で國政を料理するといふ見解で、議論政治はその理想である。薩摩や長州はこれを喜ばなかつた。しかし政府部內は贊成者が多い。具視もまたその一人である。さればいつしか土藩の主張が、實現せらるやうな可能性が濃厚になつて來た。長薩は我慢が出來なくなつた。そこで是より先慶應三年薩州の西鄕隆盛は、部下の壯士を江戸に遣り、多數の浪人を狩り集めて江戸及び關東の地方を騷がせた。彼等は遂に、江戸の警察事務を管掌せる庄內藩の屯所に發砲して戰を挑んだ。德川氏の軍隊は見るに見兼ねて薩摩屋敷を包圍して燒拂つた。兵端はこの時に開かれたのである。

この報道の大阪に達したのは、同年十二月二十八日である。大阪では、これまで慶喜がわきかへるやうな主戰論を抑制して、兵亂を未然に防いでゐた。然るに部下の兵士等は、薩州から兵端を開いたことを知つて、勘忍袋が破れた。彼等は慶喜の命を撓め、明治元年

正月二日の夜から進軍を開始したのである。岩倉具視の苦心もこれが爲めに水泡に歸した

正月三日德川氏の軍隊は、薩長二藩を掃攘する目的の下に、鳥羽伏見の關門に迫つた。此時にも具視は、なほ二藩を制して、自由の行動を執ることを許さなかつたけれども、もはやその衝突を避けしむることが出來ない。戰は必然的に開けて所謂鳥羽伏見の變を生じたのである。

戊辰の春正月の三ケ日間における此事件の發展は、近世史上意味の深いものである。また之を大局の上から見るに、政府の中心人物である具視にも德川氏の中心人物である慶喜にも、兵力に訴へて時局を解決する考へはない。而し遂にこゝに至れる所以のものは、共に同じく軍隊の勢力に左右せられたからである。かく考ふる時、我等は戊辰の春の回顧によつて學ぶところがあつたやうに思ふ』。

五三　二本松藩少年隊奮戰の史實

慶應四年の內亂に於て、會津に白虎隊と呼ぶものありしは、由來內外に宣傳せられ、少

年指導の一美談とせられつゝある。然るに、二本松に於て當時、少年隊と云ふものあり、十二歳以上の少年之れに加はり、奮戰して敵を苦しめ、終に死し又は傷けるものあるの美談に付ては、從來世人殆んど知る所なし、之れ誠に遺憾である。

維新以後、政爭を好むの徒、大兵を擁して、故更に東北の日本人を襲ひ、終に、十二歳の忠勇なる少年をさへ殺傷したのである。何人と雖、公正の心あるものならば、此の政爭を目して可也と稱することを得ないであらう。

當時、其の味方の爲めに、其の生命を捧げたる幾多の少年に付ては、日本少年の美談として、永遠に日本の內外に傳ふ可きである。其の人々左の如し（佐倉遠山著「霞城の太刀風」に依る）

『初め西軍來り犯すや、藩廳令して、老幼婦女を城外に去らしむ。兵力寡少なるを以て、少年を隊伍に編入し、限るに十五歳を以てす。藩法六十歳に達すれば、則ち致仕を許す、老人相告げて曰く、生先き長き少年をして、兵刃に殪れしめ、我等獨り世に生くるに忍びんや、隱居無用の身、一死以て君國に殉ぜんと、藩廳諭せども肯ぜず、

出でゝ、城門を圍む、少年等之を聞き、又從軍を請うて止まず、十二三歳の身を以て奮つて戰線に就けり、其氏名左の如し。

久保豊次郎	十二歳	戰死	
岡山篤次郎	十三歳	負傷	
高橋辰治	同	戰死	
德田鐵吉	同	同	
遊佐辰彌	同	同	
小川安次郎	同	負傷	
大島七郎	同	同	
成田才次郎	十四歳	戰死	
中村久次郎	同	同	
木村丈太郎	同	同	
三浦行藏	十五歳	同	

岩本清次郎　同　同
上崎鐵藏　十六歳　同
根來梶之助　同　同
奥田午之介　同　同
小澤幾彌　十七歳　同
武谷剛介　同　同
大楠勝十郎　同　同

此以外に死傷せざる少年數十名がある。

少年が、如何に勇戰奮鬪したりしかは、同書に詳しい。斯る無辜有爲なる少年を殺傷したる人々を以て、國家の功勞者と呼ぶならば、仁義廢れ、正邪順逆の名分紊れ行くべきを余は悲む。今人は、白虎隊のみに碑を建て香花を献ずるは、公正ならじ。宜しく二本松少年の爲めにも、同じようなる事業を興して、其の英靈を慰め、同時に我少年の教育に資す可きである。

五四　佐久間象山の暗殺と攘夷黨の兇暴

佐久間象山の暗殺せられた場所は、今日にては、標木を樹てゝ指示せられつゝある。併し乍ら、其の折の事情は、餘り好く世人に知られて居ない。左記の一文は、此の事情を明かにする史料である。頑迷なる當時の攘夷黨は、文明國の大勢を解せず、外國品を買ふことは國を亡すものゝ如くに考へたものであり、其の幼稚さは、此の文を以て明に知ることが出來る。斯る際に於て、佐久間象山は、西洋鞍に跨りて、攘夷黨の多く出入せる京都の市中を乘り廻りしが如きは、其の開國説に對する自信の固きを示し、追慕す可き行動と云ふべきである。暗愚兇暴の徒、天下に横行し、政爭を好むの徒は策略よりして之れを援助し、達觀明識の國士、折々暗殺せられたりしことは、眞に國民文化の爲めに遺憾であつた

尙ほ此の古文書に依りて、京都に於ける幕府の警備の方法も知ることが出來る。

佐久間象山先生死體の檢視

（京都勤役日誌の一節）

舊幕府御徒士目付　岡野義之

左記は岡野氏の遺稿にて未だ世に發表されぬ珍らしい史料である。岡野氏は先年八十三の高齡で沒せられ目下遺稿整理中であると云ふ。（同方會雜誌より）

『私は水戸藩士であるが、後に幕府に召抱へられて徒士目付となつて、京都警衛を命ぜられたが、時恰かも勤王攘夷の論が沸騰して、京都は諸藩から入込む志士の爲に、隨分我々は其の職務を盡す上に苦勞が多く危險も尠くはなかつた。私の出役中の最も大きい事件としては、佐久間象山の斬殺事件であつた。私の勤役日記のうちには、後世の人々に參考となるべき事も誌してあるから、まだ世に發表せぬもので所謂新秘史ともいふべきものを追々と發表したいと思ふが、今回は佐久間象山先生の死體を檢視したことについて申述べやうと思ふ。』

先つ自分の經歷の一端からお話せねばならぬが、今申す通り私は本國甲斐、生國は常陸

の水戸で、嘉永六年六月中旬、相州浦賀表へアメリカの黑船で水師提督ペルリが入港したのは、私の少年の時であつたが、時に我が水戸藩では、攘夷論が盛んに唱えられ、領地の要所々々には海防の柵を構へ、或は陸戰の準備をした。所で年々春季を以て水戸城の北の原野に於て、藩主を始め甲冑を着けて出馬し、これを追鳥狩と唱へ、藩士一同勢揃ひをしたものである。實に勇氣凜々たるものであつたが、何しろ世の中が騷がしくなつたので、一層斯ういふことは盛んにやつた。其のうちに世は益々騷がしくなり、水戸の藩論も二派にも三派にも分れて、國内に殺伐の氣が滿ち、脫藩するものも續々あるといふ有樣、私は父が非常に嚴格であつたので、十三歲の頃から文武の道に入り、後藤森天山（名は大雅）の門に居つて勉學して居つたが、突然萬延元年申三月三日彼の櫻田門外の變が起り、それ等よりして全藩の大議論を起した。

私は時に年十八、不平で脫藩し、同年三月十五日、一先づ野州日光山内の水戸宿坊を尋ねて潛居し、時を見て同所南本町なる日光御畫師小林愛好といふものについて、少しく畫を研究したが、熱々考ふるに天下斯くの如く多事なる今日、徒らに繪畫を弄して世を送る

は士の本分でない。祖先に對しても相濟まぬと存じたから、其の年の十一月日光を脱し、單身困苦を重ねて中仙道を潜行して京都に登つた處、幸ひにして舊友に邂逅し事の成行を逐一陳述して、斯かる多事の世の中に安閑として送るも不本意なれば、何か勤めたしと思ひ、或者の周旋傳手を得て幕府の監察吏となつて江戸へ歸つた。然るに顧想すれば私が二十三の時、文久三亥年四月二十五日五ツ時半、支配向（監察）から、御用有之京都表へ出張の旨申達しに接し、同二十八日曉天江戸を出發し、東海道を經て十三泊にて着京した。旅宿は北野天神前の某寺院であつた。

當時京地は各藩の外交方及び浮浪の士到る處に止宿し、自分が着京して未だ用向の打合せもせぬうちに、所謂尊王攘夷を唱ふる士が交々來つて殆んど夜を以て日に繼ぐ有樣であつた。されど先例に依つて着京三日間は何人にも應接せず、休息の上、京都市中見廻り役蒔田相模守、堀石見守及び月番西町奉行遠山隱岐守等と合議し市中の動勢は勿論、御所向の狀況を調査して居つたが、其のうち九月に至つて、浮浪の徒が集合し、和州五條の代官所を襲ひ、代官中村勘兵衛及び屬吏を殺戮し、金穀を奪ひ、また石見銀山の暴擧が起つた

此の主謀者は即ち筑前の平野次郎國臣、備前の藤本伴三郎眞金である。斯くの如く諸方不穩の擧多く、京阪地方三百年來の夢、俄かに破れ、到る處人々生ける色がない。

攘夷論が盛んなる結果として、西洋の貨物を商ふものは天誅を加ふべき旨意書が、市街要區の所に表榜されてあるので、該品販賣の者等は驚愕一方ならず、依つて自今以後西洋品は一切販賣せざる旨の嘆願書を、是亦天誅組の表榜してある所へ張出すといふ、實に笑止千萬の有樣であつた。六月一日には長州下ノ關を米艦通過の折、長藩士砲臺より發砲せしにより開戰あり、其の他種々の事變は時勢の然らしむるもので已むを得ない次第である。

當時京都警衛の大名及び旗本は左の通である。

京都御守護職　松平肥後守（高二十八萬石奥州會津）

同　御所司代　松平越中守（高十一萬石勢州桑名）

同　二條御城番　本庄宮内少輔

大御目付　（同　壹萬石濃州高富）　戸川近江守
御目付　（同二千五百石飯田町）　松野孫八
同町奉行東　（同　二千五百石番町）　大久保主膳正
同町奉行西　（同五千石深川森下町）　遠山隱岐守
禁裏附　（同三百石牛込御門内）　松平若狹守
同　（同千二百石愛宕下町）　牧相模守
（同　千二百石四番町）

山城國御代官　小堀數馬
京都市中見廻役　禁裏御普請川川普請掛（同六百石京都居住）
（大御番頭次席）文久貳年より新規　蒔田相模守
（同　壹萬石備中淺居）　堀石見守
（同　壹萬五千石信州飯田）

等である。

同年十一月頃より將軍家茂公に再び上洛の議を說く者があつたが、將軍家に於ては、同年六月迄上洛の處、京を辭されたる折、西丸城の炎上あり、其の他內外多事の折からなれば、再び上洛するは事の重大なるを察して、諸士の論議を採用せられず、再び上洛のことはなかつた。然るに元治元年二月の末つ方に至つて、松平大膳太夫（長州萩の藩主）禁裏御警衛の處遽かに免ぜられ、御家來共々歸國相成りたるに付、更に御警衛として左の諸侯

に仰付けられた。

松平又七郎　阿部主計頭
青山左京太夫　仙石讃岐守
永井日向守　織田英太郎
松平甲斐守　本多主膳守
九鬼長門守　加藤左京太夫

右の面々へ命令があつたけれども、徳川家の政治向行屆かざること多く、將軍の權力地に墜ち各藩其の命を奉ぜず、何れも事故を唱へて容易に人數を出張せざるに依つて、私は使者として日夜兼行大和郡山（松平甲斐守高十五萬千二百石餘）に出張し、京都へ人數繰出しのことを面談したるに、支度未だ出來ずなど言を左右に託したるも、天下の形勢を說き人數を出京させることにしたのは三月五日頃であつた。

以上私の在勤中は時勢とは謂ひながら隨分多事であつたが、其のうち同年四月中旬に至つて、信州松代の眞田信濃守家來佐久間修理といふ士、西洋學者として專ら開港說を唱へ、

山階宮晃親王殿下の召に應じ上京したといふことを耳にしたが、信州の一藩士、格別のことともあるまいと思慮したので、別段彼の身上について探索し干涉もせずに打棄て置いた。

すると七月十一日八ツ時頃（現今の午後二時半）であつたが、月番西町奉行所より急使があつて、唯今三條木屋町に於て何れの藩士とも相分らざれども、馬上にて通行の折、刺客の爲め斬殺せられたるもの有之、町方より屆出ありたるに依つて、御立合の上、御檢視相成り度しと申來つたので、私は町奉行手付きの者兩人相添へ、御小人目付某等と共に現場に臨み屍體を檢視した。場所は木屋町の中程で、西洋馬具を付けたる儘、左の脇腹へ刀の突疵深く一ヶ所、即ちそれが致命傷である。而して又背より一刀を下し深さ骨に達して居る。

其の他身體に何の異狀もない。年齡は五十五六と推定した、そして懷中物の中に眞田信濃守家來佐久間修理と記せし名札を携帶して居つたので、始めて象山先生といふことを知つた。依つて屆書を左の如く認めた。

本日八ツ時頃三條木屋町通りに於て橫死者有之候旨町方掛のものより屆出有之候間即

刻立會人召連現場に相越し檢視仕候處別紙檢證の通り相違無之候依て死體は町方の者へ引渡置候此段御屆仕候

以上

元治元年子七月十一日

御小人目付　堀澤清吉郎㊞
同　畔柳三六㊞
御徒士目付　岡野敬之進㊞

御目付衆御中

右のうち岡野敬之進とあるのは私の通稱である。

屆書の外に別紙檢證といふものを添へて出した。

檢證は左の如くである。

檢

眞田信濃守家來
佐久間修理

一、身の丈五尺三寸位顏細長く、色白く、眼細く、鼻並、齒並一本欠、髮班白、耳並（年齡五十四五年位）

單羽織、及袴を着け、大小を帶ぶ、落馬の儘相倒居り、頭を西の方に向け足を東北に延し

疵所は左の脇肋骨を刀の突疵一ケ所深く肺を貫き而して又背首の付根より五六寸を下り一刀を下し死を確むる爲め切付たるものなり

右之通

私は檢視を濟したれば、現場を引上げんとする歸途、息せき切つて注進に來た者があつた。三條大橋通東方明地に斬奸狀を表榜してあるとのことで、直ぐに同所へ往つて見ると

松代藩　佐久間修理

此者儀元來西洋學を唱へ交易開港の說を主張し樞機の方へ立入御國是を誤候大罪難捨候處剩へ蔑敕諚會津彥根の二藩と共同し中川宮へ事を謀り恐多くも　九重御親躰を彥根城へ奉移候儀を企て昨今頻りに其の機會を窺候大逆無道不可容天地國賊に付即ち今

日於三條木屋町加天誅候但斬首可懸梟木之處白晝不能其儀もの也

元治元年七月十一日

皇國忠義士

右の如き斬奸狀が表榜であつた。されど加害者は何れの藩士なるや或は浮浪の士なるや判明しないが、關東の士の所業でないことは確かである。佐久間氏が斬られた木屋町に茶屋があつた（其の名は忘れたが）其處の主婦が佐久間氏の斬られたのを目擊した。其の女の話に據ると、刺客は一人で朱鞘の刀を帶び、年齡三十七八位であつたとのこと、佐久間氏は同日早晨、山階宮晃親王殿下の邸に至り暫時寓居に歸らんとして、三條木屋町を過ぎる際、刺客に斬殺されたのである。當時朱鞘を帶したのは某藩（熊本の藩にて川上彥齊なりと云ふ）の士に限つて居たから、加害者のいづれの藩士なるやは言はずして明かである。私は町奉行の屬吏と共に探索の爲め此の茶屋の奧座敷へ三日三夜も詰切つて、種々苦心して加害者を檢擧せんとしたが、遂に手掛りをさへ得なかつたのは遺憾千萬である。實に天下の偉人ともいふべき佐久間氏の斯かる不時の災難に罹つたのは惜しみても餘りある

ことである。其の後私は同年十一月十三日江戸へ歸り、翌慶應元年五月將軍德川家茂公が長州征伐として進發につき從軍し、數ヶ月大阪に在り、同二年四月下旬伊豫國松山藩主松平隱岐守へ軍目付として御目付荒川鐵太郎（高一千二百石一番町堀端）に附屬出張し同年六月八日より隱岐守人數が周防國大島郡討入の時出張して軍を目擊した。軍も各藩の人數が揃はず、故に休戰の已むを得ぬことになつた。同八月八日將軍家茂公薨去に付休戰の命令ありたるに付き、同年十一月一日私も京都へ歸陣しそれから復命して歸府して、翌三年になると將軍大政奉還の說が紛々として、殿中の改革が頻りと行はれた。私は同年十月十日尙又京都へ御用を命ぜられて登つた。然るに京都は相變らず混雜であつた。云々』

續維新前後の政爭と小栗上野（完）

近刊

法學博士　蜷川新著　（四六版三百餘頁）

國民主義の大勢と日本人の動

『正價金壹圓五拾錢　送料十二錢

發行所　日本書院出版部

昭和六年二月廿日印刷
昭和六年二月廿三日發行

（續維新前後の政爭と小栗上野）

正價金一圓五十錢

著作權所有

著者　蜷川新

東京市麴町區麴町三丁目二番地
發行者　福田滋次郎

東京市麴町區麴町八丁目一番地
印刷者　杉田彌太郎

東京市麴町區麴町八丁目一番地
印刷所　杉田印刷所

發行所　東京市麴町區麴町三ノ二
電話九段33三七一七番
振替口座東京一二〇八六番
日本書院出版部

日本書院好評書目

蜷川新博士	維新前後の政爭と小栗上野の死		價一・五〇送一二
山崎有信	幕末血涙史		價一・五〇送一二
水谷文學士	日本三千年史蹟	歷史地理	價二・五〇送一八
同	明治大正裏面史		價一・五〇送一二
同	大日本勤王史大		價一・五〇送一二
樋口麗陽	大日本裏面史		價一・〇〇送一〇
同	大日本國辱史		價一・五〇送一〇
同	嗚呼日本未來記		價一・五〇送一二
藤森花影	幕末明治裏面史		價一・〇〇送一〇
石井龍城	明治秘話		價一・五〇送一二
西岡士郎	滿蒙夜話		價一・五〇送一二
矢萩富橋	支那馬賊裏面史		價二・〇〇送一二

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black